

■研究十二月往来〈303〉

玉葛の自意識の葛藤

〜キリの「蛍」の表現から〜

井上 愛

『源氏物語』玉鬘十帖を下敷きにして作られた(玉葛)の終曲部には、生前の「憂き名」を懺悔しようとしても煩悶してしまふ、シテ・玉葛の激情が描かれている。その部分を左に示す。本稿は、そのなかの「蛍」の表現を起点として述べるものである。(引用は日本古典文学大系『源氏物語』に拠る)。

〔中ノリ地〕地謡／げに妄執の雲霧の、げに妄執の雲霧の、迷ひもよしや憂かりける、人を初瀬の山嵐、烈しく落ちて露も涙も、散りぢりに秋の葉の身も、朽ち果てね恨めしや シテ／恨みは人をも世をも 地謡／恨みは人をも世をも、思ひ思はじただ身ひとつの、報ひの罪や数かずの、憂き名に立ちしを懺悔の有様、あるひは湧きかへり、岩洩る水の思ひに咽び、あるひは焦がるるや身より出づる、魂と見るまで包めども、蛍に乱れつる、影も由なや恥づかしやと、この妄執を翻す、心は真如の玉葛、心は真如の玉葛、長き夢路は覚めにけり

傍線部について、表章氏は日本古典文学大系『源氏物語』頭注で、

魂が身から抜け出たかと思われる程に、上の空に恋い焦がれ、宝石のように大切に顔

を包み隠していたのに、蛍の光で乱れた面影を人に見られたことも、無益な恥ずかしいことでしたよ。

と解釈された。この解釈をふまえたうえで、もうひとつの「蛍」の表現の文脈、つまり、蛍とわが「身より出づる魂」との関係性に注目し、玉葛の意識構造を捉えなおしてみたい。

〔玉葛〕引用場面・傍線部は、『源氏物語』「蛍」巻を援用した箇所である。次に掲出した『源氏』「蛍」巻のこの場面は、『伊勢物語』三九段などの、蛍火で美女を見る話型を踏襲している(引用は新編日本古典文学全集『源氏物語』(三)に拠る)。

寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれたり。蛍を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて、にはかにかく掲焉掲げんに光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかしげなり。(中略)宮は、人のおはするほど、さばかりと推しはかりたまふが、少しけ近きけはひするに、御心ときめきせられたまひて、えならぬ羅らの帷子の隙より見入れたまへる

に、一間ばかり隔てたる見渡しに、かくおぼえなき光のうちほのめくををかしと見たまふ。(中略)ほのかなれど、そびやかに臥したまへりつる様体のをかしかりつるを飽かず思して、げにこのこと御心しみにけり。

亡き夕顔の忘れ形見・玉葛を六条院に引き取った光源氏は、彼女への恋着を抑えきれずにいるが、玉葛の求婚者のひとりである蛍の宮を六条院へ招きいれ、御几帳の帷子のうちに蛍を放ち、玉葛を闇のなかに浮かびあがらせた。彼女の姿を一瞬見た蛍の宮はその美貌に心を奪われる。この場面は、「寄りたまひて」以下、まず光源氏の視点に沿って描かれ、「宮は」以下では、同じ場面が蛍の宮の視点から語り直されている。着目したいことは、明滅する蛍の光が男たちの熱情を炙りだす小道具であるとともに、光源氏・蛍の宮という二人の「見る男」の眼差しによって玉葛が「見られる女」となっていることである。蛍の光は、玉葛自身の恋心を外化させるものではない。当該場面における「見る男」と「見られる女」の関係性は、「犯し」への連想も孕んでいるが、玉葛と光源氏の二人は結ばれない、危うい均衡が保たれたものに仕立てられている。男たちの恋慕の情をかきたたせる女としての玉葛像は、蛍火によって、彼らの視線にとらえられてこそ成立しうるものであった。

梗概書のなかで『源氏物語提要』は、当該場面を比較的詳述し、蛍の宮の名の由来を語る。玉かつらの君、かたち美しくまませば、公卿みな心をかけられし中にも、源氏のおとと兵部卿の宮深く心を懸給へり。或時、

夏の事なるに蚊帳の内に玉かつらおはしける所へ、兵部卿宮をおひ入給ふとき、女君のうつくしきを見せ申さんとて、源氏ほたるを余多あつめ、かやの内へ入給ひければ、蛍の光りにて玉かつらの美しきを見給へり。是によりて宮の名を蛍の兵部卿と申しける事、すゑに見えたり。

『提要』では傍線で示したように、蛍火によって玉葛の美貌が見られたことが記されている。

ところが、〈玉葛〉終曲部・傍線部では、あきらかに、和泉式部の和歌、

もの思へば沢の蛍もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞみる

〔後拾遺集〕神祇・1162〕

が踏まえられることよって、玉葛は、わが「身より出づる魂」としての蛍火を彼女自身の視線のうちで捉えている。〈玉葛〉だけでなく、能において、〈葵上〉「水暗き、沢への蛍の、影よりも、光る君とぞ契らん…」、〈鉄輪〉「貴船の、川瀬の蛍火…」のように、「もの思へば…」の和歌の流れから「蛍」の語が導きだされる。執心によつて幽鬼となつたシテが登場する葵上〈鉄輪〉において、己の魂を蛍火によそえる和泉式部の和歌における発想は、きわめて馴染みやすいものであつたといえる。それは、〈玉葛〉における、「魂」と「蛍」の関係にも持ち越されているだろう。

和歌において、包まれたものから洩れ出してしまふ蛍の光と隠しえぬ恋心を、二重写しにして詠まれたものが散見する。

つつめどもかくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

〔後撰集〕巻四・夏・209〕
おもひあれば袖に蛍をつつみてもいはばやものをとふ人はなし

〔新古今集〕巻十一・恋一・1032〕寂蓮法師）
一首目「つつめども…」を本歌のひとつとして、二首目「おもひあれば…」は詠まれている。

隠していても洩れでてしまふ蛍の光は、抑えても溢れる恋心の比喩である。終曲部「包めども、蛍に乱れつる、影」は、蛍の光に照らされた玉葛の姿だけではなく、和泉式部の和歌の「蛍」と響き合うことにより、玉葛の包まれていた「魂」が浮き出てきたことをも示唆するのである。

前掲・和泉式部の和歌の「沢の蛍」の表現から想起されるのは、飛び交う蛍の光である。和歌に詠まれる蛍火は一匹が飛ぶイメージよりも、乱舞する蛍火のほうがいメージしやすい。蛍の群れる光から「乱れた」姿、ひいては思い悩む己の有りようへと援用していく手法は、禅竹作と確実視される「杜若」で見られる。

人待つ女、物病み玉簾の、光も乱れて飛ぶ
蛍の、雲の上まで往ぬべきは、秋風吹くと、

かりに現れ（新潮日本古典文学集成『謡曲集』上）に廻る
右の傍線部では、『伊勢物語』四五段「行く蛍雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁に告げこそ」を下敷きにしつつ、在原業平と関係をもつた女たちと「乱れて飛ぶ蛍」を響きあわせる景

が加えられている。「乱れて飛ぶ蛍」という具体的な景をくわえることよつて、蛍を景物としてだけでなく、女たちの心の内を透かし見るものとなつていともいえるかもしれない。

「包めども、蛍に乱れつる、影」の文脈に、歌語における蛍の乱舞する光と玉葛の魂が相関しており、彼女が見る蛍の光は彼女の乱れる魂でもある。では、玉葛が見る、乱れる己の魂はどのようなものか。

〈玉葛〉終曲部には、山嵐によつて秋の木葉が散り散りになる情景描写にも、いっそ心身が朽ち果ててしまえという玉葛の想いを表出させている。この自己破壊的とすらいえる思いからは、柏木や蛍の宮などから恋心を受けとめる女の情念というより、自らの「憂き名」を世間に知られてしまつたわが身を消したいと苛む、彼女の自意識の葛藤がうかがえる。

後場では、松岡心平氏が詳述しているように、「つくも髪」「寝乱れ髪」といった黒髪に関連する艶めかしい語の文辞が散りばめられている。〔能 大和の世界〕山川出版社、2013〕。その文辞によつて表される不特定多数の男たちを惑わした美貌の女・玉葛という、世間が己に貼りつけたイメージを彼女自身は否定していない。己に貼り付けられている「憂き名」のイメージを拒絶し得ない自分を恥じらい、そのような自分を見つめるところに彼女の葛藤がある。玉葛は、蛍が乱れ飛ぶさまに、葛藤を抱える己の魂があくがれ出づるさまを重ねあわせている。彼女は、蛍を見つめることよつて、男たちに「見られる」女としてだけではなく、自身を「見る女」としての眼も同時に獲得している。世間のイメージを受け入れて自分と、彼女自身が描く自画像が食い違っているにも関わらず、その両者を内在させている己の葛藤を見つめているところに彼女の理性がある。

彼女の葛藤は、自らを傷つけることすら厭わな
い自己破壊願望に近い位相をもつことになる。
そのような玉葛の煩悶は、式子内親王の和歌、
玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶる
ことの弱りもぞする

〔新古今集〕卷十一・恋一・1034)
を引用した、禅竹作(定家)の

「サシ」シテ、いまは玉の緒よ絶えなば絶えね
ながらへば 地謡、忍ぶることの弱るなる、
心の秋の花薄、穂に出で初めし契りとて、ま
た離れがれの中となりて シテ、昔は物を思
はざりし 地謡、後の心ぞ果てしもなき

という、式子内親王が定家との仲を語る箇所
とも相關すると思われる。「玉の緒よ…」では、
恋心を隠しきれぬならわが命を絶ってしま
いとする、思い詰めた恋心が詠まれている。(定
家)では、「玉の緒よ…」の末句を「弱るなる」と
変更している。そこには「逢ひ見ての後の心に
くらぶれば昔は物を思はざりけり」〔拾遺集〕
恋二・藤原淳忠)の和歌を援用して、自分の抱
える恋心を隠し通せない自分の弱さを認識す
る式子内親王の眼がある。定家との恋を貫き
たいと想う恋情の激しさと、そう出来ない自
分のおかれている状況の切なさを見つめ、両
者を客観視する彼女の理性があると思われる。
その点で、玉葛と式子内親王の意識構造は近
似しているといえる。

禅竹は、玉葛と式子内親王の執心の内実
にある自意識の亀裂を描き出した。恋の執心だ
けではなく、世間と己との狭間で苦しむ理性
を持つ女性像を定着させたといえよう。

(十文字学園女子大学非常勤講師)